

種の起源たるこの地で、  
再び人類の未来を託されたのは、  
ある一台の農機だった。

アフリカ大陸東部、タンザニア。大陸最高峰のキリマンジャロ山や最大面積のビクトリア湖を有する世界屈指の壮観の地は、それと同時に、人口の約7割が農業に従事する農業立国でもある。その大いなる大地を、軽快な廻転と排出を続けながら、凛々しく進んでいるのは、半世紀にわたってアフリカ農業を支援してきたクボタが、自信を持って彼の地に送り出すコンバインDC70の頼れる姿である。

『農業の生産性と収益性を上げることで、自国の食料自給率を安定させながら、経済成長と貧困削減に貢献する。』にはその先にある、アフリカ全土や世界規模の食料循環の礎となり得ることはできないものだろうか？  
クボタは、そんな「高い壁」に、真っ向挑戦しています。

アフリカ特有の圃場においても高効率に刈り込む「高度の作業性」、製品自体の寿命を長く保つ「優れた耐久性」、ユーザー視点に立ったメンテナンスや研修をも行う「充実のサポート体制」……やがて、コンバインDC70を始めとしたクボタの農機は、タンザニアのみならず、世界食料のラストフロンティアと目されているアフリカ諸国において高い信頼を得て、更なる活躍を期待されることとなったのです。

早暁。朝霧に煙るキリマンジャロを望むこの地こそは、「種の起源」とも称される「始まりの地」。そんな人類の未来が生まれた地で、再び、自国の――そして世界の――食料という名の希望を収穫し続けているのは、この一台の農機である。起源の地の輝く曙光を、その全身に清冽に浴びながら。

壁がある。  
だから、行く。